

なぜ若者は齋藤氏、国民民主、石丸氏に投票したのか

その2つの争点

有料記事民意のゆくえ

聞き手 シニアエディター・尾沢智史 2024年11月27日

伊藤昌亮さん

朝日新聞デジタル > なぜ若者は齋藤氏、国民民主、石丸氏に投票したのか その… > 写真・図版



伊藤昌亮さん

若い世代から強い支持を受けたという、都知事選の石丸伸二氏、衆院選の国民民主党、兵庫県知事選の齋藤元彦氏。そこに共通するものは何なのか。

「石丸現象とTikTok」「ひろゆき論」などが話題になった**社会学者の伊藤昌亮さん**が、三つの選挙から見えた若者世代の意識を読み解きました。

——今回の衆院選の結果、特に**国民民主党が若い世代の支持を集めたこと**をどう見えますか。

「衆院選を考える上で鍵になるのは、世代間対立です。投票日前後の3日間に、X（旧ツイッター）でどんなキーワードが盛り上がったかを調べてみたのですが、公示1週間前の3日間に比べて『**シルバー民主主義**』は**18倍**、『**現役世代**』も**6倍**に増えています。社会保障費や医療費についての投稿も目立ちました。対照的に、大きな論点になると思われた『**選択的夫婦別姓**』などはほとんど増えていません。安倍晋三政権時代のような左右間の対立ではなく、**世代間対立という構図が明確に出て、『手取りを増やす』というフレーズで現役世代優先を掲げた国民民主党が躍進した**のでしょう」

「それは、東京都知事選での『石丸伸二現象』や、兵庫県知事選で斎藤元彦氏が再選されたこととも間違いなくつながっています。石丸氏は、老害批判、既得権批判で若い世代の支持を得ました。兵庫県知事選でも、県議会や県庁は既得権益のかたまりで、斎藤氏はそれを壊そうとしているという『物語』が、現役世代を中心に受け入れられた。やはり世代間対立の構図がつくられ、既得権を批判する側が支持されたといえます」

高齢化社会における「弱者の新自由主義」

——既得権批判は以前からあり、新しい現象ではないのでは。

「**既得権益の打破を求める声の高まりは、1990年代からありましたが、いまはイノベーションの推進と結びついているのが新しい**ところです。衆院選で興味深い争点だったのが**保険証**です。**私が調査した期間中では、保険証についての投稿は、夫婦別姓に関するものより多かった**ほどです」

「いまの世代間対立には**二つの大きな争点**があって、**一つは税や社会保障をめぐる世代間の不公平、もう一つは『高齢者が日本のイノベーションを妨げている』という主張**です。**保険証はその象徴**とされています。若い人たちには、高齢者のせいでマイナ保険証すら進まない、中国や韓国、台湾に決定的に立ち遅れているという感覚があるのでしょうか。選挙後、立憲の野田佳彦代表が、まず最初に『紙の保険証を残します』と言いましたが、**若い世代からすれば、イノベーションを妨害する老害**にしか見えなかったでしょう」

——なぜ世代間対立が激しくなっているのでしょうか。

「戦後の日本社会は、ある意味で、国民皆保険、国民皆年金が支えてきたといえます。しかし高齢化が進んで、受益者と負担者の間の不公平感が高まった。**若い人たちにとっては、自分たちは損ばかりしているという感覚**があるのでしょうか。税金や社会保険料の負担はできるだけ減らして、**自分の力で生きていけばいいと思う**ようになっている。そういう人たちに、国民民主の『手取りを増やす』が刺さるわけです」

「これは新自由主義的な動きではあるんですが、強者の新自由主義ではなく、**生活が苦しい人が生き延びるための『弱者の新自由主義』**といえます。若者世代から見ると、高齢者は既得権に守られている強者で、自分たちは弱者なのです」

「過激化する中道」と学歴エリート

——「弱者」だからこそ、既得権打破を掲げる石丸氏や斎藤氏、国民民主を熱狂的に支持したわけですか。

「高齢者やリベラルだけでなく、自民党やマスメディアまで含めて既得権益層と見なし、それに対する過激な異議申し立ての動きが出てきています。欧米でいう『**エキストリームセンター（極端な中道）**』に近いかもしれません。左派も右派も既得権益層で、それを打破しようとする中道が過激化して、ポピュリズム的な支持を集めていくわけです」

「ただ、**従来のポピュリズムと違うのは、反エリートという要素が薄い**ことです。石丸氏は京大卒の元銀行員で、国民民主の玉木雄一郎氏や兵庫の斎藤氏は東大卒の元官僚です。いわば**エリート主導の反既得権益であり、ポピュリズム**なのです。そこが日本維新の会やれいわ新選組とは違うところでしょう」

「**既得権益の打破に加えて、イノベーションを推進するために、高学歴エリートに期待**が集まる。衆院選で維新が退潮したのは、馬場伸幸代表に古いイメージがありすぎて、イノベーションにつながらないと思われたこともあったでしょう」

三つの選挙があらわにした「新しい分断」

——石丸現象や国民民主の躍進、斎藤氏の再選から、何が読み取れるのでしょうか。

「いま日本社会で、**左右の対立とはまったく違う対立や分断が進行している**ということだと思います。なかなか言葉にしにくいのですが、『**社会の安定か、改革か**』という**対立に近い**かもしれません。**生活が苦しい現役世代というボリュームゾーンが改革を望んで、石丸氏や玉木氏、斎藤氏を支持している**」

「彼らから見れば、**自民も立憲もマスメディアも既得権益の味方**で、社会を変えようとしない。そこに大きな分断ができてしまっているのです。この新しい分断をどう埋めていくかが、これからの大きな課題になるでしょう」

伊藤昌亮さん

いとう・まさあき 1961年生まれ。成蹊大学教授。専門はメディア研究、社会学。著書に「ネット右派の歴史社会学」「炎上社会を考える」など。



常見陽平 (千葉商科大学准教授・働き方評論家)

2024年11月27日 16時2分 投稿

【提案】

■ 社会を読み解く補助線の引き方を変えよう 声に出して読みたいインタビューである。やや挑発的に言うならば、「**毎朝、新聞を読んでもおじさん（私だ）**」では、**今の社会、中でも若者を読み解くことができないと確信**した次第である。なんでも「左右」で解釈しようとしてしまう。こういう頭の中の**55年体制、いや2012年体制的な視点がよくない**。「社会の安定か、改革か」という視点は秀逸である。

私もコロナ前から注目していた、**極中「エキストリームセンター」**に関して言及しているのもナイスだ。「安定と改革」「極中」この補助線で、物事を読み解くと見えてくる。左右をこえて、考えよう。

○ **まとめ読みができます**



本田由紀 (東京大学大学院教育学研究科教授) 2024年11月27日 16時9分 投稿

【視点】

関心を引かれたのは、記事内の「ただ、従来のポピュリズムと違うのは、反エリートという要素が薄いことです。石丸氏は京大卒の元銀行員で、国民民主の玉木雄一郎氏や兵庫の斎藤氏は東大卒の元官僚です。いわば**エリート主導の反既得権益であり、ポピュリズム**なのです」という部分である。確かに彼らは出身大学だけから見

れば「エリート」と言ってよいかもしれない。しかし、そもそも「エリート」とは何か。 斎藤氏のように公益通報のルールも踏みにじり、公選法違反疑惑の渦中にあるような人間は「エリート」か。玉木氏のように不倫や問題発言が相次ぐ人間は「エリート」か。肩書だけは立派かもしれないが、浅ましいとも言える言動や認識を垂れ流す人間は「エリート」なのか。彼らが受けてきた、難関とされる教育機関での教育内容を含め、**日本における「エリート」のありようについて根底から検討が必要**のように思う。さらに、「弱者のポピュリズム」から若者が彼らを支持するというこの記事の見立てが正しいのであれば、ネットリテラシーや社会の現状と方向性に関する若者の認識（の問題点）がいかに形成されてきたにも吟味が不可欠だろう。